

第一四章
どうする？

「新型コロナウイルス感染が広がってから一年以上経ったけれど、進化したのはウイルスの方で人間の方は変わりばえしないなあ」

田中のけだるい声を聞きながらテレビの中ではビデオレコーダーを分解して歯ブラシで焦げた部品を掃除する山本が返答する。

「国民の善意、特に医療関係者の善意や努力で何とか凌いでいるって言う感じね」

「サラリーマンといっしょじゃ」

大家の言葉に田中は視線を移動させる。

「サラリーマン？」

「そうじゃ。給料も上がらないのにけなげにサービス残業をする。しおらしいにもほどがある。

働き方改革と言ってから何年経つのじゃ。言い出しっぺの首相は新型コロナウイルス感染対策を途中で放り出して働くのをやめた」

山本が歯ブラシ作業を止めずに慰めるように声だけ出す。

「自ら究極の働き方改革を実行したって事ね」

歯ブラシの動きを見つめながら田中が追従する。

『保健所が目詰まりしていてPCR検査数が増えない』と言ってたけど、いくら何でも一年もあれば目詰まりは解消できると思うんだけど」

山本が歯ブラシを置くと油を差し始める。

「誰もブラシを持たないからホコリはたまったまま。いつまでも目詰まりしたまま」

「なるほど」

田中のセリフに大家が少しむっとする。

「のんきに『なるほど』など言っている場合じゃないぞ。いったいこの一年余り、政府は何を
していたのじゃ」

そのとき山本の横に官房長官そっくりの男が現れると田中がすぐ気付く。

「逆田^{さかた}さんだ。変装したって分かる。お久しぶりです」

逆田は挨拶を返すことなく官房長官になりきって味気ない慇懃無礼な言葉を発する。

「目詰まり対策する暇もないほど新規感染者が急増したからどうしようもなかった。協力をお願いしても人流が減らなかった。性善説に立って物事を進めていたので仕方なかった」

急に山本がマイクを持って逆田演じる官房長官に迫る。

「はつきり言ってください」

「何を？」

「要は『国民が言うことを聞かずに酒を飲んで大騒ぎするからコロナウイルスの感染症を止めることができなかった』と言いたいのでしょ」

「そうは言っていないません」

「わかりました。性善説に立つて対処すれば間違えると言うことは、国民が政治家に対して持っている考えです。ある意味お互い様ですね」

逆田扮する官房長官は少しうろたえるがすぐにいつもの調子に戻る。

「我々政府は絶えず国民を信頼して政策を実行しています。その根本に性善説があると言いたかっただけです」

これ以上同じ話をして意味がないと山本は新たな質問をぶつける。

「一年前の今頃、オリパラの中止を決定しました。覚えていますか？」

遮るように官房長官が応える。

「過去のことよりこれからの事が大事です」

山本は官房長官を無視して続ける。

「私は覚えているかという質問をただけです。まあ忘れたのなら仕方ありません。思い出しただけのように配慮して質問を続けます。オリパラは中止しましたが、ゴーツー・キャンペーンを始めました。はしよりますが特にゴーツー・トラベルで新型コロナウイルスが全国に蔓延しました」

官房長官が言葉を遮る。

「今年はゴーツー・トラベルはしていない。問題ありません」

「そういう問題ではなくてあのとときゴーツー・トラベルをなぜ実行したのか、そしてその結果

なぜ感染が広がったのか、なぜもつと早くゴーツー・キャンペーンを中止しなかったのか……
検証が全くされていません。ついこの間のことですよ……」

「検証は絶えず行っている。その上で今後何をすべきか関係各省庁と緊密に連携して都道府県知事とも情報を共有しながら高い緊張感を持って協議している」

「一番緊密に連携しなければならぬ国民には相談もしないのですか？」

「このように記者会見を開いて状況を国民に詳しくお伝えしている」

「伝えるのはいいですが、伝わっているかどうかは検証しているのですか？」

「しっかりと丁寧にお伝えしている」

「しっかりと丁寧でもないから、人流が増加しているのでは？」

「それは……伝わっていないというより、国民のストレスの問題で……」

「そのストレスの原因は政府のウイルス感染拡大への対応が後手だから、あるいは具体的な説明がないからでは？」

「政府としては適切に広報して対応策の透明性を確保しております。手を抜くことなく絶えず国民に真摯にお伝えしております」

「適切に、透明に、真摯に、緊張感……形容詞が多すぎます。検討中、慎重に判断、いつまでも検討し続けて判断しないまま終わるのでは？ それに国、都、オリパラ組織委員会、I O Cの責任のなすりつけ合い。見苦しいです」

山本と逆田演ずる官房長官との激しいやりとりが続くが平行線をたどる。突っ込んで突っ込んで決して官房長官は具体的な説明から逃げるだけだから。

オリパラ委員会は国が大規模イベント会場では観客数を収容定員の五〇パーセント以内で最大一人を原則と言っているものでそれに従うとだけアナウンスする。

オリンピック・パラリンピックは単なる大規模イベントではなく四年に一度の全人類最大の祭典だ。だから通常の大規模イベントとは異なるルールで観客の収容定員を決めるべきである。にもかかわらず自ら定員を検討することもなく、きちんとオリパラの特殊性を検討した上で無観客がベストという感染症に詳しい専門家の意見を無視して国の基準を流用しようとする。

関係省庁の官僚に操られた所詮は素人の総理大臣、担当大臣の意見と専門家の意見のいずれが現実的な対応なのか、その判断もせずに政府の方針に従うとだけしか言わない。

これでは目がかすんで見えないのに歯科医で治療を受けるようなものだ。「霞ヶ関^{かすみ}」とは言い得て妙だ。

またオリパラ委員会が会場で酒類の提供を検討していると聞いた都知事は委員会が調整中だと言っているのでコメントは調整後の判断を待つ言う。政府もオリパラ委員会が適切に煩瑣に判断されると考えているとコメントするだけ。しかも東京都が酒類の提供を控えるよう要請があれば連携をとるがここの事案については検討中だと言うだけ積極的にはコメントしない。

そうこうしているうちにオリパラのスポンサーであるビールメーカーが酒類の販売の自粛を申し出てきた。これは賢明な判断であるとともに価値のある宣伝だった。

このスポンサーのように国民の空気を読み取りスピード感を持たない割には迅速に判断するのに政府や都やオリパラ委員会などは本当に国民のために最善の方法を検討しているのだろうか。検討はしているのかも知れないが詳しい説明や具体的な方策は明らかにしない。

ぼけた発言をして炎上しないように保身を計っているだけかもしれない。責任をとりたくないから当然発言も英断からほど遠い。「様々な状況に対して緊張感を持つて注視して関係各省庁や都道府県知事と緊密に連携して専門家の意見をいただきながら総合的に判断して場合によっては躊躇せずに見直す」といった何を言っているのか分からない発言を繰り返し続ける。

前進することがすべてではない。前進が無謀となることはよくあることだ。だから立ち止まる勇気が必要となる。それこそ躊躇なく立ち止まりそれまでのことを検証する。そのための時間をとるのは浪費ではない。形容詞を並べるのではなく具体的に詳細に関係者省庁ではなく国民に説明をして的確な反応が醸造された時点ですぐさま今後の方針を伝える。そして専門家の意見を聞いた上で実行する。もちろんその方針が「後退」あるいは「撤退」であったとしても。

原点に戻るとはよく言ったものだ。オリパラを開催するのならば無観客だろう。その後得意な「緊張感を持つて注視」して感染が縮小傾向フェーズに入った時点で、少しずつ観客を入れてみる。もちろん誰を入れるのかという大問題があるが、公平な方法をとれば、つまり誰も

第一四章 どうする？

が納得できる方法をとればいい。最善の方法を模索し実行するのが本来政府がすべき仕事であるはず。

このように不毛な内容のやりとりが続くとさすがに疲れたのか逆田扮する官房長官が画面から消滅する。